

# 日本植物病理学会ニュース 第87号

(2019年8月)

## 【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 内藤繁男



1943年12月群馬県生まれ。1967年東京農工大学農学部植物防疫学科卒業、1970年北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻修士課程修了。1971年（旧）特殊法人日本甜菜振興会てん菜研究所、1973年同組織国立移管に伴い農林省北海道農業試験場てん菜部に配属。

1983年農学博士「てん菜葉腐病に関する研究」（北海道大学）。1989年インドネシア中央食用作物研究所（JICA長期専門家2年）、1991年東北農業試験場病害生態研究室長、1997年北海道農業試験場病害研究室長、2000年北海道大学大学院農学研究科教授。2007年定年退職、名誉教授。その後、農水省プロジェクト研究の専門PO、評価分科会委員等（11年）。

学会活動：評議委員、原著編集委員、賞選考委員、病名委員、大会委員長、北海道部会長、ISPPリゾクトニア委員会委員、土壤伝染病談話会運営委員長。その他、日本菌学会大会委員長、馬鈴しょそうか病に関する国際シンポジウム組織委員長等。

著書：最新植物病理学（朝倉書店、2004）、植物病害の事典（朝倉書店、2001）、*Rhizoctonia species: Taxonomy, Molecular Biology, Ecology, Pathology and Disease Control* (Kluwer Acad. Publ, 1996) ほか（分担執筆）。

研究活動：主に*Rhizoctonia* 菌を研究対象とした。完全世代ではテンサイ・ダイズ等の葉部病害に果たす担子胞子の役割を、また不完全世代ではテンサイ根腐病激発畠の菌核衰退要因としての土壤小動物（キノコバエ）幼虫の関与を解明するなど、その過程で多くの疫学的新知見を得た。本菌の同定では、従来の同定基準である菌株間の菌糸融合頻度は必ずしも菌糸融合群（AG）やサブグループの決め

手にならず、DNA レベルでの解析手法の併用が不可欠なことを警鐘した。それら成果により、2006年日本植物病理学会賞「リゾクトニア属菌の完全、不完全世代の生態学的研究」を受賞した。2核*Rhizoctonia* では、AG 標準菌株の混乱（欠株や変異）から、国内外研究者と共同で国際的標準菌株を再選定し、関係機関に供託した。その他、紙筒移植栽培によるジャガイモそうか病の回避技術を開発し、その成果は1988年農林水産試験研究成果10大トピックス（4位）に採択され、内心驚きであった。

最後に、ご指導賜った恩師、諸先輩、並びにご協力を頂いた多くの皆様方に深謝致します。令和の新時代を迎える植物病理学の益々の発展を祈念致します。

永年会員 稲垣公治



昭和18年4月29日、三重県生まれ。42年3月：岐阜大学農学部卒業。44年3月：同大学院修士課程修了。4月：名城大学農学部助手に採用。61年3月：農学博士（大阪府立大学）。63年4月：在外研究員として米国：マサチューセッツ州立大学に1年間出張。平成8年3月：農学部教授。15年4月：大学付属農場長。28年4月：名誉教授。

学会活動：平成10年（正式不明）：日本バイオコントロール研究会幹事、平成14年：関西病虫害研究会評議員、平成16年：植物病理学会評議員。著書：日本植物病害大事典（分担執筆）。

研究活動：岐阜大学において橋岡良雄先生、池上八郎先生の両名誉教授のもとで、植物病害研究に圃場の観察・調査に基づいた研究の重要性を教示され、イネいもち病菌の変異性について学ぶ。名城大学においてはイネ紋枯病を含む各種菌核病を対象とし、主に発生生態について調査・研

究を行う。まず、各種菌核病の発生実態を愛知県内～西日本各地域水田について調べ、同時に病原菌である各種菌核病菌の形態的、生理的特徴をみた。引き続いて、病原菌の個体群構造の概念をもとに、水田内での菌核病発生が多くの菌種内菌株群（菌糸和合性群：MCG）によって引き起こされていることや、また近隣水田間ならびにイネ～水田～雑草間における各種菌核病菌の移動の実態等も解明した。このように、水田内での菌核病発生を理解するためには各種菌核病菌の種内多様性を考慮することが重要であることを明らかにした。これらの調査研究は、一部、中国およびインド両国農業大学との共同研究に基づいても実施された。

最後に、農学、特に作物保護分野に長期にわたり携われ、多くの方々にご支援・ご協力を頂いたことに心より感謝します。植病学会の益々の繁栄と会員皆様方のご健闘を祈ります。

#### 永年会員 門脇義行



1942年9月26日、島根県に生まれ、1965年島根県立農科大学農学科（現 島根大学生物資源科学部）を卒業。同年島根県に採用され、安来病害虫防除所を経て、1967年から2003年まで島根県農業試験場（現 島根県農業技術センター）に勤務した。

1968年から恩師尾添茂博士の指導の下、ブドウさび病の被害発生機構、侵入発病条件、防除対策について調査研究した。1973年からは野菜病害虫実験予察事業とイネすじ葉枯病の発生要因、防除薬剤を明らかにするとともに人工接種法を開発した。

1975年には農業技術研究所糸状菌第一研究室で梶原敏宏博士、高橋賢司博士から、植物病害の発生生態解明法について指導を受けた。このうち病徵の撮影法は後述するイネ各種菌核病の図版作成の礎となった。

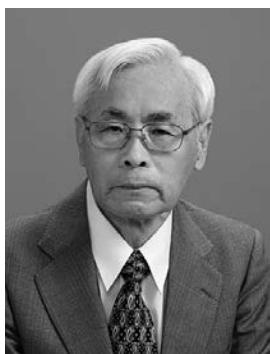
1984年からは発生予察事業に従事した。1986年から農林水産省の「イネ疑似紋枯病の発生予察方法の確立に関する特殊調査」に参画し、各種菌核病の診断学的特徴を明らかにし、診断法を確立するとともに分布様式、水田内の生息推移調査法により伝染環を解明し発生予察方法の確立に貢献した。当時農業研究センター病害虫防除部長加藤肇博士ほか、諸先生方、佐賀大学名誉教授野中福次先生から調査法と取りまとめについて懇切な指導を受けた。1995年「イネに疑似紋枯症を起因する各種菌核病の診断学的・疫

学的研究」により神戸大学より博士（農学）が授与された。本研究により2001年には全国農業関係試験研究場所長会から研究功労者表彰を受けた。

1995年から赤名分場長、環境部長、技術次長として中山間地農業技術の開発や研究調整を行った。2003年県退職後は山陽薬品島根支店で農薬の安全使用用務に携わり、2017年からはトマト栽培施設に勤務し、生産現場では的確な診断と発生態の活用が不可欠であることを痛感しています。

このたび永年会員に推挙いただき大変光榮であり感謝致しています。これまで指導いただいた諸先生方、調査研究を共に行った同僚に厚くお礼申し上げるとともに、本学会のますますの発展をお祈りいたします。

#### 永年会員 小金澤碩城



1944年2月1日、長野県生まれ、1968年3月東京大学農学部農業生物学科卒業、1973年9月東京大学農学系大学院博士課程修了、同年12月「イネ縞葉枯病ウイルスに関する研究」で農学博士号授与、1973年10月果樹試験場盛岡支場研究員、1989年9月国際稲研究所植物病理部上級研究員、1994年8月四国農業試験場生産環境部病害研究室長、2000年4月中国農業試験場地域基盤研究部上席研究官、2004年3月名称が変わった近畿中国四国農業研究センター定年退職、同年4月からカネコ種苗（株）へにさだ育種農場技術顧問、2019年3月同社退職。

東京大学ではイネ縞葉枯病ウイルスを発見し、1978年「イネ縞葉枯病ウイルスに関する研究」で日本植物病理学会学術奨励賞を受賞した。果樹試験場ではリンゴいぼ皮病、リンゴ腐らん病、リンゴウイルス、リンゴウイロイドの研究に従事した。いぼ皮病菌は *Botryosphaeria* 属であること、腐らん病菌の毒素はリンゴに含まれるフロリジンが菌により分解されたものであることを明らかにした。ウイルス・ウイロイド関係ではリンゴさび果ウイロイドとリンゴステムピッティングウイルス、のちに岩手大学でウイルスベクターとして開発・利用されたリンゴ潜在小球形ウイルスを発見した。2000年「リンゴウイロイド病に関する研究」で、日本植物病理学会賞受賞。国際稲研究所ではツングロ病抵抗性系統の評価およびその抵抗性系統を侵すウイルス系統の研究を行った。四国および中国農業試験場ではカーネーション萎縮叢生症が高温時の土壤の過湿が原因である生理

病であること並びにレタスビッグベイン病に関するウイルスおよびその媒介菌の分類が間違っていたことを明らかにした。カネコ種苗ではZYMV 抵抗性ズッキーニとキュウリ、TSVV 抵抗性トマト、ベト病およびビッグベイン病抵抗性レタス品種育成の手助けをした。

学会の活動は学会誌編集幹事と病名委員をつとめただけでした。本会の運営に御尽力くださった多くの皆様に御礼申し上げますと共に、学会の益々の発展を祈念しております。

#### 永年会員 松本 熱



1943年10月14日岡山県生まれ、1966年3月愛媛大学農学部農学科卒業、1966年4月愛媛大学農学部助手に採用、1993年3月京都大学より博士（農学）を取得、1993年8月愛媛大学農学部助教授に昇任、1995年4月愛媛大学大学院連合農学研究科担当、2006年4月愛媛大学農学部長補佐、2007年4月准教授に配置換、2008年6月愛媛大学農学部教授に昇任、2009年3月定年退職。

研究内容：主としてダイコンの根とベト病菌の系における、「病態植物のリグニン生成とその誘導機作」について検討した。本研究は恩師浅田泰次先生との共同によるものである。成果の概要は、①病態植物組織では柔組織の細胞壁に新しくリグニンが生成し、それが防壁となってその後の病原菌の侵害を阻止した、②維管束系の細胞壁に既存するリグニンはシリング型であるが、病態植物の柔組織細胞壁に新生するリグニンはグアヤシル型であった、③病態植物組織ではシキミ酸経路の代謝が高まり、PALなどの酵素が新しく合成された、④リグニン生成の引き金となる木化誘導因子は、病態植物組織のみでなく、傷害を受けた組織にも存在し、かつそれによってつくられる傷害リグニンは、病態リグニンと同じ化学構造をもつグアヤシル型であった、⑤木化誘導因子は糖ペプチドであり、それは最初から植物細胞壁に結合しており、病・傷害などのストレスによって遊離し、エチレンが本因子の作用を活性化した、⑥木化誘導因子にエチレン発生剤を加えて、キュウリ葉に散布すると炭疽病の発病抑制効果が認められた。浅田先生から「食いついたら離すな、Quick response ピシィ」という語句を教わりました。つまり、執着心と迅速で正確さが研究の進展につながるのです。

学会では大会運営委員、バイオコントロール研究会幹事

を務めた程度ですが、この度永年会員にご推挙いただき大変光栄に思います。

末筆ながら、永年にわたりご指導・ご援助をいただいた学会および愛媛大学関係の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、本学会のますますのご発展を祈念いたします。

#### 永年会員 小川 奎



1943年6月島根県生。1966年岡山大学農学部卒業。同年4月農林省農事試験場環境部病害第二研究室、1981年10月茨城県農業試験場病虫部（農林省指定試験地）、1987年7月農林水産省農林水産技術会議事務局振興課、1989年4月農業研究センタープロジェクト第2チーム長、1992年同研究企画科長、1995年4月北海道農業試験場生産環境部長、1997年4月九州農業試験場企画連絡室長、2000年4月同場長、2001年4月（独法）農業技術研究機構理事、2006年4月（独法）農業・食品産業技術総合研究機構理事、2007年5月（財）日本植物調節剤研究協会会长、2012年4月（公財）同理事長、2016年5月退任、顧問就任。2006～10年内閣府総合科学技術会議専門委員。1986年農学博士（東京大学論博）。

学会活動：評議員、受賞等：1988年科学技術庁長官賞（研究功績者表彰）、1989年日本植物病理学会賞、2013年瑞宝中綬章。著書等：土壤病害をどう防ぐか、農業有用微生物（共著）、フザリウム・分類と生態・防除（共著）他。

研究内容：サツマイモつる割病では、その伝染様式、品種抵抗性と検定法、そして、サツマイモ体内に生息する非病原性フザリウム菌に着目し、その前接種で誘導される全身抵抗性による生物農薬としての防除法と本菌の製剤化を図る。麦類の土壤伝染性病では、作付麦種の違いによる病原ウイルスの分布に基づいた耕種的防除法。キャベツ根こぶ病では、作物・土壤肥料・経営・農薬等の異分野の研究者を結集した連作障害に関するプロジェクト研究チーム長として、現地実態調査手法をベースに、群馬県大産地の圃場カルテ診断をさらに前進させ、衛星データによる土壤類型からみた発生危険地帯の診断、合理的な圃場管理の経済的評価。キュウリつる割病では、幼苗による土壤検診や種子伝染様式。キュウリ斑点細菌病では、まん延の原因となるキュウリ葉上の濡れと、水や薬液の飛散に伴う伝搬を解明。放線菌によるサツマイモ立枯病では、土壤pH・温度等の発生要因の解明と総合防除法、等の研究に取り組む。

この間、ご指導を賜った多くの方々、共に研究を行った方々、そして、素晴らしい研鑽の場であった学会に、心より感謝申し上げます。今後とも、生産現場に役に立つ植物病理分野の研究や技術開発が益々発展することを期待しております。

### 【会員の動態】

#### 1. 人事

##### (1) 大学関係

村上二郎	2018.4	吉備国際大学 農学部 釀造学科 准教授
橋本将典	2018.10	東京大学 大学院農学生命科学研究科 栽培学研究室 助教
湊 菜未	2018.12	新潟大学 農学部 植物病理学研究室 助教
新屋友規	2019.1	岡山大学 資源植物科学研究所 植物・昆虫間相互作用グループ 准教授
石川一也	2019.2	宇都宮大学 バイオサイエンス教育研究センター 特任助教
北畠信隆	2019.3	〔退職 東京理科大学 大学院理工学研究科 助教〕
根岸寛光	2019.3	〔退職 東京農業大学 農学部 植物病理学研究室 教授〕
石井英夫	2019.3	〔退職 吉備国際大学 農学部 地域創成農学科 教授〕
多賀正節	2019.3	〔退職 岡山大学 自然科学研究科 教授〕
	2019.4	岡山大学 自然科学研究科 特命教授（研究）
加藤 寛	2019.3	〔退職 宇都宮大学 バイオサイエンス教育研究センター 特任助教〕
	2019.4	高崎健康福祉大学 農学部生物生産学科 准教授
夏秋知英	2019.4	宇都宮大学 理事・副学長（研究・将来構想担当）
中島雅己	2019.4	茨城大学 農学部 植物病理学研究室 教授 (研究室の名称も変更)
山次康幸	2019.4	東京大学 大学院農学生命科学研究科 植物病理学研究室 教授
宮崎彰雄	2019.4	東京大学 大学院農学生命科

渡邊 健	2019.4	学研究科 植物医科学研究室 特任助教
橋本研志	2019.4	東京理科大学 大学院理工学研究科 助教
岩波 徹	2019.4	東京農業大学 農学部 植物病理学研究室 教授
横田健治	2019.4	東京農業大学 応用生物科学部 応用微生物学研究室 教授
千葉壯太郎	2019.4	名古屋大学 生命農学研究科 植物病理学研究室 准教授
相野公孝	2019.4	吉備国際大学 農学部 地域創成農学科 教授
(2) 農水省関連独法関係		
小野塚信哉	2018.4	農研機構・北海道農業研究センター 生産環境研究領域 病虫害グループ 研究員
岡部郁子	2018.7	農研機構・中央農業研究センター 飼養管理技術研究領域 飼料作物病害虫グループ 上級研究員
菅原幸哉	2018.7	農研機構・中央農業研究センター 飼養管理技術研究領域 飼料作物病害虫グループ 上級研究員
越智 直	2018.10	農研機構・本部企画調整部 主任研究員(行政事務研修員)
	2019.1	農研機構・農業情報研究センター 農業AI研究推進室 主任研究員
	2019.4	農研機構・農業情報研究センター 農業AI研究推進室 確率モデルチーム 主任研究員
松下陽介	2018.10	農研機構・野菜花き研究部門 花き生産流通研究領域 生産管理ユニット 主任研究員
	2019.4	兼 農業情報研究推進センター 農業AI研究推進室
	2019.4	農研機構・野菜花き研究部門 花き生産流通研究領域 生産管理ユニット 主任研究員
	2019.4	兼 農業情報研究センター

		農業 AI 研究推進室 確率モデルチーム	仲川晃生	2019.3	[退職 農研機構・野菜花き研究部門 企画管理部 リスク管理室 室長]
吉田めぐみ	2018.10	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ 上級研究員 兼 農業情報研究センター 農業 AI 研究推進室	青木孝之	2019.3	[退職 農研機構・遺伝資源センター 微生物分類評価チーム チーム長]
	2019.4	農研機構・農業情報研究センター 農業 AI 研究推進室 確率モデルチーム 上級研究員 兼 東北農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ	中島 隆	2019.4	農研機構・本部 総括調整役 兼 NARO 開発戦略センター 兼 企画戦略本部 本部長
高山智光	2018.11	農研機構・農業情報研究センター 農業 AI 研究推進室 主任研究員	中畠良二	2019.4	農研機構・本部 経営戦略室 研究管理役
	2019.4	農研機構・九州沖縄農業研究センター 園芸研究領域 イチゴ栽培グループ 主任研究員 兼 生産環境研究領域 虫害虫害グループ 兼 農業情報研究センター 農業 AI 研究推進室 画像認識チーム	奥田 充	2019.4	農研機構・本部 企画戦略本部 研究推進部 研究推進総括課 課長 兼 中央農業研究センター 病害研究領域 リスク解析グループ
井上康宏	2019.2	農研機構・本部 企画調整部 上級研究員 兼 中央農業研究センター 病害研究領域 病害防除体系グループ	眞岡哲夫	2019.4	農研機構・北海道農業研究センター 企画部 部長
	2019.4	農研機構・本部 企画戦略本部 経営企画部 上級研究員 兼 中央農業研究センター 病害研究領域 病害防除体系 グループ	奈良部孝	2019.4	農研機構・北海道農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長
門田育生	2019.3	[退職 農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長]	佐山 充	2019.4	農研機構・北海道農業研究センター 企画部産学連携室 農業技術コミュニケーションセンター
月星隆雄	2019.3	[退職 農研機構・西日本農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長]	串田篤彦	2019.4	農研機構・北海道農業研究センター 生産環境研究領域 線虫害グループ グループ長
平八重一之	2019.3	[退職 農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長]	太田光祐	2019.4	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ 研究員
岩波 徹	2019.3	[退職 農研機構・果樹茶業研究部門 リンゴ研究領域 研究領域長]	荒井治喜	2019.4	農研機構・中央農業研究センター 水田利用研究領域 研究領域長 兼 技術支援センター長
			鈴木文彦	2019.4	農研機構・中央農業研究センター 地域戦略部 事業化推進室 室長
			赤松 創	2019.4	農研機構・中央農業研究センター 企画部 産学連携室 産学連携コーディネーター
			植原健人	2019.4	農研機構・中央農業研究センター 企画部 産学連携室

芦澤武人	2019.4	産学連携コーディネーター 農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 抵抗性利用グループ グループ長	西澤洋子	2019.4	管理ユニット 上級研究員 農研機構・生物機能利用研究部門 遺伝子利用基盤研究領域 組換え作物技術開発ユニット ユニット長
野口雅子	2019.4	農研機構・中央農業研究センター 病害研究領域 生態的防除グループ 上級研究員	佐藤 衛	2019.4	農研機構・遺伝資源センター 微生物分類評価チーム チーム長 兼 調整室
笹谷孝英	2019.4	農研機構・西日本農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長	埋橋志穂美	2019.4	農研機構・遺伝資源センター 微生物分類評価チーム 主任研究員
川口 章	2019.4	農研機構・西日本農業研究センター 生産環境研究領域 病害管理グループ 主任研究員 兼 農業情報研究センター 農業AI研究推進室 確率モデルチーム	不破秀明	2019.4	農研機構・種苗管理センター 北海道中央農場 業務第1部 部長
伊藤陽子	2019.4	農研機構・西日本農業研究センター 畑作園芸研究領域 環境保全型野菜生産グループ 上級研究員	(3) 都道府県試験研究機関関係		
園田亮一	2019.4	農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 研究領域長	加賀友紀子	2019.3	[退職 青森県産業技術センター 野菜研究所病虫部 研究員]
井上博喜	2019.4	農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 病害グループ 上級研究員	平野泰志	2019.3	[退職 埼玉県農業技術研究センター 品種開発・ブランド育成研究担当 専門研究員]
塩谷 浩	2019.4	農研機構・果樹茶業研究部門 カンキツ研究領域 研究領域長	深見正信	2019.3	[退職 千葉県農林総合研究センター 生物工学研究室 室長]
兼松聰子	2019.4	農研機構・果樹茶業研究部門 企画管理部 企画連携室 室長	原澤良栄	2019.3	[退職 新潟県農業総合研究所 所長]
大崎秀樹	2019.4	農研機構・果樹茶業研究部門 企画管理部 企画連携室 果樹連携調整役 兼 企画管理部 企画連携室 広報プランナー 兼 生産・流通研究領域 病害ユニット	影山智津子	2019.3	[退職 静岡県農林技術研究所 果樹研究センター 果樹環境適応技術科 科長]
伊藤 伝	2019.4	農研機構・果樹茶業研究部門 リンゴ研究領域 リンゴ病害虫ユニット ユニット長	三上哲壯	2019.3	[退職 島根県西部農林振興センター 県央事務所 課長]
上田重文	2019.4	農研機構・野菜花き研究部門 野菜病害虫・機能解析研究領域 病害ユニット 上級研究員	井上 興	2019.3	[退職 山口県周南農林水産事務所 所長]
川部眞登	2019.4	農研機構・野菜花き研究部門 花き生産流通研究領域 生産	高橋尚之	2019.3	[退職 高知県幡多農業振興センター 技術次長]
			吉松英明	2019.3	[退職 大分県農林水産研究指導センター 農業研究部 部長]
			三澤知央	2019.4	北海道立総合研究機構 法人本部 研究企画部 主査
			池田幸子	2019.4	北海道立総合研究機構 農業研究本部 道南農業試験場 研究主査
			白井佳代	2019.4	北海道立総合研究機構 農業

		研究本部 十勝農業試験場 研究主査	平山喜彦 2019.4	奈良県農業研究開発センター 環境科 指導研究員
藤根 統 2019.4		北海道立総合研究機構 農業 研究本部 花・野菜技術セン ター 研究主任	間佐古将則 2019.4	和歌山県農林水産部 農業生 産局 果樹園芸課農業環境・ 鳥獣害対策室 主任
村田暢明 2019.4		北海道立総合研究機構 農業 研究本部 上川農業試験場 研究職員	村本和之 2019.4	山口県農林総合技術センター 資源循環研究室 室長
近藤 亨 2018.4.		青森県産業技術センター 野 菜研究所病虫部 研究管理員	吉岡陸人 2019.4	山口県農林水産部 農業振興 課 主任
横山とも子 2019.4		千葉県農林総合研究センター 生物工学研究室 室長	森 充隆 2019.4	香川県農業経営課 環境・植 物防疫グループ 課長補佐
鐘ヶ江良彦 2019.4		千葉県農林総合研究センター 病理昆虫研究室 上席研究員	清水伸一 2019.4	愛媛県農林水産部農業振興局 農産園芸課 課長
鈴木 健 2019.4		千葉県農林水産部 担い手支 援課 技術振興室 副技監 兼 室長	萬 周平 2019.4	愛媛県農林水産部農業振興局 農産園芸課 技師
吉澤安紀子 2019.4		群馬県農林大学校 農林部野 菜コース 主任	井上智絵 2019.4	愛媛県農林水産研究所 農業 研究部病害虫防除所 技師
岡本昌広 2019.6		神奈川県農業技術センター 病害虫防除部 主査	竹内繁治 2019.4	高知県農業技術センター 所長
黒田智久 2019.4		新潟県農業総合研究所 園芸 研究センター 環境施設科 専門研究員	森田泰彰 2019.4	高知県農業技術センター 生 産環境課 課長
棚橋 恵 2019.4		新潟県農林水産部 経営普及 課 副参事	矢野和孝 2019.4	高知県農業技術センター 生 産環境課病理担当 チーフ
石川浩司 2019.4		新潟県病害虫防除所 業務課 業務課長	林 一沙 2019.4	高知県農業技術センター 生 産環境課病理担当 研究員
佐々木大介 2019.4		静岡県賀茂農林事務所 地域 振興課 技師	山崎修一 2019.4	大分県農林水産部 地域農業 振興課 安全農業班 総括
丸山美咲 2019.4		静岡県農林技術研究所 病害 虫防除所 研究員	福本律子 2019.4	大分県北部振興局 生産流通 部 技師
西野 実 2019.4		三重県農業研究所 農産物安 全安心研究課 課長	有村聖矢 2019.4	大分県企画振興部 大分県東 京事務所 技師
川上 拓 2019.4		三重県農業研究所 農産物安 全安心研究課 主査研究員	玉野井昭 2019.4	大分県南部振興局 生産流通 部 主任
中川寛之 2019.4		滋賀県農業技術振興センター 栽培研究部 作物・原種係 技師	尾松直志 2019.4	鹿児島県農業開発総合セン ター 企画調整部 普及情報 課 主任農業専門普及指導員
松浦克成 2019.4		兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 企画調整・経営支援 部 主任研究員	2. 学位取得者（課程博士・論文博士）	
浅野峻介 2019.4		奈良県北部農林振興事務所 農林普及課 主査	柳澤広宣 2018.9	岩手大学大学院 連合農学研 究科 博士（農学） ポスピ ウイロイドの包括的検出法の 開発と花粉を介した垂直・水 平伝染メカニズムの解明
			鈴木浩之 2018.9	筑波大学 大学院生命環境科 学研究科 博士（農学） ア

		カマツ葉さび病菌 <i>Coleosporium</i> species の生活史戦略の多様性		transport in plant disease resistance (植物の病害抵抗性における核膜孔を介した物質輸送制御因子の機能に関する研究)
Malek Khaled Mahmoud Marian			Auliana Afandi	
2018.9	岐阜大学 連合農学研究科 博士（農学） Isolation and characterization of novel bio-control agents for controlling tomato bacterial wilt	2019.3	岐阜大学 連合農学研究科 博士（農学） Population structure analyses of plant pathogenic oomycetes using microsatellite markers	
王 士臻 2018.9	神戸大学 農学研究科 博士（農学） Identification and utilization of resistance genes against the wheat blast fungus in common wheat	Wenzhuo Feng	岐阜大学 連合農学研究科 博士（農学） Development of simple detection methods of plant pathogenic oomycetes	
竹内 徹 2019.3	北海道大学 農学研究院 博士（農学） コムギ眼紋病の病原菌とその防除に関する研究	西岡友樹 2019.3	岐阜大学 連合農学研究科 博士（農学） ネギ属植物栽培土壤のフザリウム病抑止性機構を基盤とした発病抑止土壤の作出	
宮崎彰雄 2019.3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士（農学） 热帯作物に発生する萎黄叢生病の病原と診断技術に関する研究	伊川有美 2019.3	京都府立大学 生命環境科学研究所 博士（農学） Studies on regulatory mechanisms of virulence-related genes in a plant pathogenic bacterium, <i>Xanthomonas oryzae</i> pv. <i>oryzae</i>	
吉田哲也 2019.3	東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士（農学） 植物 RNA ウィルスに対する高度抵抗性の分子機構に関する研究	Ombiro Geofrey Sing'ombe	岡山大学 環境生命科学研究所 博士（農学） Study of specific growth inhibitors of <i>Ralstonia solanacearum</i>	
益子嵩章 2019.3	東京農工大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） クリニウイルスの病原性の分子機構に関する研究	Lei Zhao 2019.3	岡山大学 環境生命科学研究所 博士（農学） Role of Class III peroxidase PRX34 in plant oxidative burst and immunity	
Fariha Wilisiani	2019.3 東京農工大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） Research on Begomoviruses Isolated from Cucurbits in Indonesia	菊原賢次 2019.3	九州大学 大学院資源生物科学専攻 博士（農学） 福岡県における落葉果樹病害の薬剤耐性糸状菌の現状と対策に関する研究	
木村教男 2019.3	名古屋大学 生命農学研究科 博士（農学） イネいもち病菌のメラニン生合成阻害剤耐性菌の生態と防除に関する研究			
水野邑里 2019.3	名古屋大学 生命農学研究科 博士（農学） Involvement of regulators for nuclear-cytoplasmic			

## 【新入会員情報】

安達修平 農研機構・九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域

足立龍弥 福岡県農林業総合試験場病害虫部 予察課

ALBERTO, Ronaldo Department of Crop Protection, College of Agriculture, Central Luzon State University

藤 結宇 長野県野菜花き試験場 環境部

GAN, Pamela 理化学研究所 環境資源科学研究センター 植物免疫研究グループ

羽田 厚 岩手県農業研究センター 病理昆虫研究室

星野啓佑 群馬県農業技術センター 環境部 病害虫係

IDA Bagus, Andika 岡山大学 資源生物科学研究所

伊藤拓摩 日本植物防疫協会 茨城研究所

小島一輝 岐阜県農業技術センター 病理昆虫部

近藤知弥 佐賀県果樹試験場 病害虫研究担当

小坂能尚

三浦 宗 農林水産省

森 昌樹 農研機構・生物機能利用研究部門

森戸 梓 石原産業株式会社 中央研究所

中野正貴 東京理科大学 理工学部 応用生物学科

中野道彦 九州大学 システム情報科学研究院

中野亮平 Department of Plant Microbe Interactions, Max Planck Institute for Plant Breeding Research

沼田慎一 (一社)日本植物防疫協会 茨城研究所

小田裕太 山口県農林総合技術センター 資源循環研究室 発生予察グループ

小川 正 (一社)日本植物防疫協会

及川貴也 OAT アグリオ株式会社 研究開発部

Saidi, Noor Department of Cell and Molecular Biology, Faculty of Biotechnology and Biomolecular Sciences, Universiti Putra Malaysia

裕田孝之 株式会社山東農園

佐藤健治 山形県農業総合研究センター 園芸試験場 園芸環境部

柴田隆豊 滋賀県農業技術振興センター 環境研究部 病害虫管理係

菅原隆介 山形県農業総合研究センター 食の安

全環境部

須志田浩稔 農研機構・野菜花き研究部門 野菜病害虫・機能解析研究領域

高木 紘 ミネソタ大学 植物微生物学科

谷口麦子 農研機構・種苗管理センター 北海道中央農場

UNARTNGAM, Arm Research Promotion and Technology Transfer center, Faculty of Liberal Arts and Science, Kasetsart University Kamphaengsaen Campus

UNARTNGAM, Jintana Department of Plant Pathology, Faculty of Agriculture, Kasetsart University Kamphaengsaen Campus

渡邊幸子 佐賀県農業試験研究センター 環境農業部

吉田徳一郎

(2018年5月～2019年4月)

## 【学会活動状況】

### 1. 研究会・談話会等開催報告

#### 第19回植物病原菌類談話会

第19回植物病原菌類談話会は、平成31年度日本植物病理学会大会終了後の平成31年3月20日の13:15～17:30、つくば国際会議場大会議室101にて開催された。大学、公立の試験研究機関、国立研究開発法人、独立行政法人、植物検疫機関、農薬メーカー、種苗会社及び農業団体などから158名（うち学生21名）の参加があった。今回の談話会のコーディネーターは、石川県農林総合研究センターの森川千春が務め、「卵菌、接合菌、子囊菌、担子菌—旧？菌界を見渡します—」というテーマのもと、4題の講演が行われた。演者およびその講演題目は、稻葉重樹氏（製品



会場の様子

評価技術研究機構 NBRC)「卵菌類の新分類体系に向けて」、出川洋介氏(筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所)「消滅してしまった?接合菌類の分類と多様性」、細矢剛氏(国立科学博物館植物研究部)「子囊菌類の最近の分類体系を俯瞰する」、白水貴氏(三重大学大学院生物資源学研究科)「担子菌類の未知系統探索が解き明かす新たな多様性」であった。

今回の談話会は、これまでの特定の菌群を扱うものではなく、いわゆる、広義の菌類全体、特に植物病原菌に関連するクロミスタ界と菌界を一気に見渡す企画として各講演に60分を取り、講演内容、質疑とも充実したものになった。各演者がそれぞれのご専門の分類群について、基礎的な内容から分類の変遷を含めて丁寧に解説してください、参加者からは、知っているようで知らなかった菌類の生態や形態など、教科書的に理解していた内容が実際のところはどうなのか?というような素朴な質問から、環境DNA解析を行うことで知り得る菌類の未知なる系統を実際に応用現場でどのように活用できるかという実践的な質問が挙がった。ご講演の内容であった菌類の基礎的な研究の情報提供が、参加者の応用的な展開に繋げるヒントとなつたと考えている。残念なことは、年度末であったことにも起因したのか、学生参加者が予想より少なかったことである。

今回も本談話会の開催にあたっては、準備の段階から多くご支援をいただいたつくば大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度はアジア植物病理学会議(Asian Conference on Plant Pathology, ACPP)の1セクションとして談話会の開催を予定しています。  
(渡辺京子)

## 2. 技術士対応委員会

平成30年度技術士第二次試験(農業部門・植物保護)で11名が合格

平成31年3月8日に平成30年度技術士第二次試験(農業部門・植物保護)の合格者が発表されました。次の11名の方が合格されました(敬称略・官報掲載順)。

篠田徹郎(福島大学農学群食農学類)、澤田康介(国際耕種株式会社)、横山早苗(茨城県鹿行農林事務所)、横山幸男(アリストライフサイエンス)、桑原克也(群馬県農試部農政課)、宮田伸一(農研機構中央農業研究センター; 本会会員)、笹部雄作(黎相庭園/プラントツリー・リサーチ; 本会会員)、金子政夫(長野県野菜花き試験場)、野見山孝司(農研機構野菜花き研究部門; 本会会員)、伊藤啓司(愛知県経済農業協同組合連合会)、金野弥(ジェイアール東海不動産株式会社)。

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験(農業部門・

植物保護)合格者は計133名となりました。引き続き、試験研究機関や民間企業、大学など、多様な組織から多くの方の受験をお願いします。令和元年度の技術士第一次試験は令和元年10月13日(日)に行われます。また、技術士第二次試験の筆記試験は令和元年7月15日(月・祝)に行われております。詳細は日本技術士会のホームページ(<https://www.engineer.or.jp/>)の試験・登録情報から、試験の実施案内を御確認ください。令和元年度多くの技術士(農業部門・植物保護)の誕生を期待しています。

(濱本 宏)

## 【学会活動予定】

### 1. 部会

#### (1) 北海道部会

日時: 2019年10月17~18日

場所: かでる2・7(北海道札幌市)

#### (2) 東北部会

日時: 2019年9月24~25日

場所: 秋田ビューホテル(秋田県秋田市)

#### (3) 関東部会

日時: 2019年9月19~20日

場所: 東京大学農学部(東京都文京区)

#### (4) 関西部会

日時: 2019年9月19~20日

場所: 滋賀県立大学(滋賀県彦根市)

#### (5) 九州部会

日時: 2019年11月6日

場所: 大分県労働福祉会館(大分県大分市)

## 2. 談話会・研究会等

### (1) 第54回植物感染生理談話会

日時: 2019年8月28日(水)~30日(金)

場所: 十勝川温泉笹井ホテル(北海道河東郡音更町)

### (2) 第15回植物病害診断教育プログラム

日時: 2019年9月9日(月)~13日(金)

場所: 岡山大学農学部(岡山県岡山市)

### (3) EBC(Evidence-based Control)研究会ワークショップ2019

日時: 2019年9月18日(水)

場所: 東京大学農学部(東京都文京区)

### (4) 第13回植物病害診断研究会

日時: 2019年11月1日(金)

場所: 吉備国際大学農学部南あわじ志知キャンパス(兵庫県南あわじ市)

## 【受章のお知らせ】

### 永年会員の勝部利弘氏、瑞宝双光章を受章

本会永年会員の勝部利弘氏が平成30年秋の叙勲において瑞宝双光章を受章されました。瑞宝章は公務や公共的な業務に長年にわたり従事して功労を積み重ね、模範となる成績を上げたことにより国が授与する章です。勝部利弘氏は、東北農試でいちばん病の生理生態学的研究を、四国農試においては野菜類のウイルス病、土壌病害、細菌病等の防除に関する研究を行われ、独創的、先駆的な研究成果を挙げられました。また、スリランカやパラグアイでジャガイモの疫病をはじめとした熱帯高冷地の野菜類病害やワタ、ダイズ、カンキツ類病害の防除に関する共同研究に従事されるとともに、後発発展途上国(LLDC)を中心に海外へ120回余り渡航されるなど、日本及び海外の植物病害防除研究に多大な貢献をされました。  
(藤田佳克)

## 【関連学会情報】

### 第34回報農会シンポジウム

#### 『植物保護ハイビジョン—2019』のご案内

##### —わが国農業の持続性と植物保護〈国内・世界の趨勢に挑む技術とシステム〉—

趣旨：不安要素が山積の日本の農業であるが、いかなる状況になろうとも国内農業の持続は国の存続にかかわる大前提である。平時にはなかなか思い至らないが、精神的支柱、食糧安全保障、さらに環境と資源の維持・保全に国内農業の果たす役割の大きさを改めて考えたい。担い手不足、コスト低減、国際競争など日本の農業をめぐる困難な課題は、植物保護においてもこれらの克服なしに前進はない。前回のシンポジウムでは、困難な状況にありながらも未来に希望の光を灯すユニークな成果を取り上げた。今回はさらに一步進めて、国内・世界の趨勢に対応しながら植物保護が日本農業の持続に寄与するための方策を、技術とシステムの両面から探ってみたい。

主催：公益財団法人 報農会

協賛：日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農薬学会、一般社団法人日本雑草学会

日時：令和元年9月25日（水）10:00～16:30

場所：「北とぴあ」つづじホール（東京都北区王子1-11-1）

TEL 03-5390-1100（会場への連絡は出来ません）

JR京浜東北線：王子駅北口より徒歩2分

東京メトロ南北線：王子駅5番出口直結

開会：10:00～10:10 挨拶

理事長 田付貞洋

講演：10:10～11:00 農薬取締法の改正について

農林水産省農薬対策室 石岡知洋

11:00～11:50 ドローンを用いた防除の展望

DJI JAPAN（株）岡田善樹

11:50～13:10 昼食・休憩

13:10～14:00 生物的防除を基幹としたIPMへの移行とその意義

宮崎大学農学部 大野和朗

14:00～15:10 GAPを利用した茶の経営改善の取組

埼玉県茶業研究所 小川英之

（有）東阜狭山茶 横田園

横田泰宏

15:30～16:30 総合討論

参加費：一般 2,000円

学生 事前申込み無料、当日 1,000円

申込み：参加をご希望の方は、9月17日までに下記連絡先までEメールまたはFAXで所属・連絡先と氏名をお知らせ下さい。当日、参加費と引き換えにテキストをお渡し致します。なお、当日の参加も可能です。

連絡先：公益財団法人 報農会 事務局

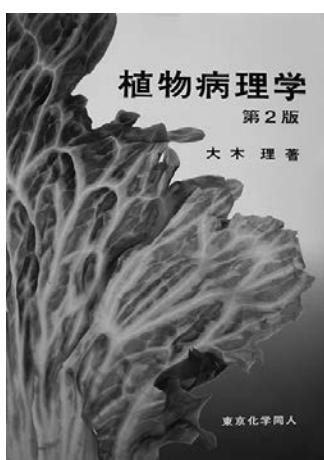
〒187-0003 東京都小平市花小金井南町1-12-11

BLOSSOM みさと

TEL/FAX：042-452-7773

E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp

## 【書評】



植物病理学 第2版

大木理著, 2019, 東京化学同人, 東京, 165pp.

B5版, ソフトカバー, 定価¥2,500(税別)

長く親しんできた平成が

終わりを告げて令和の御代

に突入せんとするこの時期

に、我々大学で植物病理学

を講じるものにとって極め

て嬉しいニュースです。も

ちろんこれは教員だけでな

く植物病理学を受講する学生さんたちにとっても非常に喜ばしい話題に違いありません。大木理氏による「植物病

理学第2版」の刊行です。

2007年にこれまでの日本の植物病理学の教科書の常識を超える一冊が、当時大阪府立大学の若手現役教授であった大木 理氏によって上梓されました。現役の先生による本であること（多くの教科書は編著者の停年を機に出版）、全編を一人で仕上げていること（日本では複数著者が一般的）、言葉遣いが非常に平易であること（難しい内容を平易な言葉で表現）、判型が週刊誌サイズでソフトカバーであること（ご本人も目指した電車の中でも手に取って読める本）、何しろ廉価であること（農学を専攻する身として、このくらい買っておいてもいいかな感）、しかし内容には十分な重みがあること（基礎と展開という二段構えの記述に加え図表・索引等の充実）などなど正に異例づくめでした。著者はその後も逐次部分的な改定を進め、微細な誤記の訂正や内容のアップデートに努めてこられたのですが、既に発刊から10年以上を経、さらにはご自身も現役を離れ（現在名誉教授）、多少は執筆に専念できる環境が整ったこの時期に、後輩である我々に対しての贈り物として、一段進んだ今回の一冊をものされたと想像します。

第2版ではカバーが刷新されて外見が変わりましたが、これまで通りソフトカバーB5版で手に取りやすく、基本的な事項とやや突っ込んだ知識等を区別して記し、記述が簡潔で分かりやすいなどといった特徴がそのまま受け継がれています。これも初版と同様、各章の最後には、そこで扱った内容を大胆に要約した「まとめ」があり、これを押さえておけば、その章全般の内容をある程度把握することができます。初学者にとっては有難い上に非常に親しみやすく、教える側にとっても大いに頼りになる存在であることは、これまで以上に太鼓判が押せるものになっています。主に第5部に顕著な内容の改定ですが、発刊時以降の科学技術の進歩に伴って明らかになった最新の情報等が書き加えられています。本書の特徴の一つとして英語キーワードの充実があげられます。最近は外国人学生がどの学校でも目に付くようになりました。彼らが日本語の講義で植物病理学を学ぶに際して、本文中の英語併記はもちろんですが、巻末にある英語索引が大きな助けになっていることは疑いの余地がありません。私自身も学生による授業評価の中で、とある外国人学生から大いに助かったとのコメントをもらいました。また、主要病害のリストについては、初学者は数の多さに驚愕するでしょう。しかし、ここで簡潔に種々の病害を紹介してもらうと、授業の途中で面倒な説明をいちいち差しはさまなくとも済むので非常にありがたかった記憶があります。さらに所々に見られるちょっとかわいらしい挿絵が、恐らく著者ご本人の手によるものであり、これ

もまた大いなる親しみやすさを与えてくれる源泉になっています。何よりうれしかったのは、初版と変わらず2,500円という廉価が貫かれていること。これには平成の御代後期の物価安定という事実が寄与している部分が大きいとはいえ、知識量の増加に比例して記述量も相当に増加するのが普通のところ、一人で全編を担当するという我々にとっては神業的な能力をお持ちの著者が、全編にわたってエイヤアと鉛をふるい、ページ数をわずかな増加に留められたことの証であろうと推察する次第です。

あまり褒めすぎてもいけないので一つだけ苦言を。初版では青色をアクセントにしていたものが、同じ著者による2016年発刊の微生物学と同様、今回赤を基調とする印刷に変わりました。初版では赤ペンを使うことによって紙面がフランス国旗風のトリコロールになってきれいだったのですが、今回は青ペンを用意しなくてはならないようです。ちょっと残念。（公益社団法人 緑の安全推進協会会長、前・東京農業大学 根岸寛光）

### 【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行しております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報を寄せ下さい。とりわけ、今号に掲載いたしました会員の動静につきましては、編集委員の目が行き届いていない職場等も多々あろうかと存じます。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

藤田佳克、足立嘉彦、大島研郎、池田健太郎、久保田健嗣

### 編集後記

学会ニュース第87号をお届けします。本号は、今年度推薦された名誉会員と永年会員のご紹介、会員の動静、研究会などの学会活動の報告等々、盛りだくさんの記事を掲載しました。

新しく1名の方が名誉会員に、5名の皆様が永年会員に選ばれました。学会への多大なご貢献に深く感謝申し上げますとともに長年にわたる精力的なご活躍に対して敬意を表したいと思います。

今春も多くの方々に異動がありました。ご退職された皆様、長い間大変お疲れ様でした。職場やポストが変わられた皆様、心機一転、新しい仕事での益々のご活躍を祈念いたします。学位を取得された皆様と新たに会員になられた皆様をご紹介しました。皆様の今後の更なるご活躍を期待しております。

3月20日に大会のサテライトとして植物病原菌類談話会が開催されました。158名の参加者があり、前号でお届けした植物病理を紡ぐ会、殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム同様、興味深い講演や話題提供が行われ、熱心な議論と質疑が交わされました。同じく大会期間中に試験対策セミナーが開かれた技術士については、平成30年度は11名の方が合格されたとのこと、大変喜ばしい限りです。今年度

も多くの方が技術士に合格されることを期待します。

年末までの学会活動の主な予定を掲載しました。部会や談話会・研究会など多くの集いが開催されます。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。

喜ばしいお知らせです。勝部利弘氏が瑞宝双光章を授章されました。誠におめでとうございます。

今年3月に出版された「植物病理学 第2版」を根岸寛光氏にご紹介いただきました。内容の簡潔さと分かりやすさや英語キーワードの充実など、外国人も含めた学生への親しみやすさを丁寧に解説して頂きました。関連分野の教科書として広く利用されるものと期待されます。

(藤田佳克)

---